

## 歴史を動かす日

### 移民革命の先導者

2012年10月21日の『ジャパントイムズ』に「移民が日本を救う」という見出しの記事が載った。結びは「革命家とは、いつか自分たちの時代がくるという強い信念を持って生きていく人たちなのだろう」である。

この記事を書いたマイケル・ホフマン氏は、在日歴30年余の知日家である。『日本型移民国家への道』と『人口崩壊と移民革命』のふたつの著作を読んで、私を移民革命の先導者と名付けて移民国家ビジョンを内外に紹介した。

〈革命家の顔：元法務官僚、元東京入国管理局長の坂中英徳は、日本が崩壊寸前であることを危惧し、「2050年までに1000万人の移民を受け入れなければならない」と述べる。〉

これが日本を代表する英字紙に掲載されると、日本で生まれた移民革命思想は世界の知識人に衝撃を与えたようだ。ジャパントイムズによると、世界の読者から大きな反響があったということである。

反骨の官僚の異名をもつ元行政官がどうして「革命家」と呼ばれる人間になったのか。それは偶然のなせる業である。外国人行政に身を投じて移民政策の立案をライフワークとしてきた日本人が、人口崩壊という「日本存亡の危機」とめぐり合ったからだ。

移民政策のエキスパートの道歩んだのは、奇跡が起きたとしか言いようがない政策論文：『今後の出入国管理行政のあり方について』を1975年に書いたからだ。それをきっかけに移民政策に関する理論的研究と理論の実践をこつこつ積み上げた結果、世界の知識人から「ミスターイミグレーション」と認められるようになったということである。

職業人生を振り返ると、行政官として一途な気持ちで移民問題と取り組んできたが、特別の才能があったわけでも人一倍の努力をしたわけでもない。あたかも天から白羽の矢が立ったかのように移民革命の先導役が回ってきたということである。幸運のたまものである。

そして現在、順風に帆をあげて歴史を動かす日を待っている。「待てば海路の日和あり」が今の私の心境である。

### 移民政策の本質に迫る

以下の引用文は、1975年の坂中論文の「国際間の人口移動」の章の総論部分をまとめたものである。40年前に書いた論文であるが、国際人国移動と移民政策の本質に迫った快心の作である。

その中で、「先進国においては、豊かな社会が形成され、出生率と死亡率がともに低下し、

少子高齢化社会を迎えている。そこでは、製造業、重化学工業等の基幹産業やサービス部門における労働力不足の問題が新たに生じている」と、40年後の日本の姿を的確にとらえている。

移民国家議論が本格化する中、この論考が移民問題の本質を考える場合の参考になれば幸いである。

〈人類の歴史を振り返ると、生存のため、あるいはより良い生活環境を求めて人が新しい土地に移り住む、地球規模での人の移動と定住の歴史であったと見ることができる。今日、人類は多くの民族と国民に別れて世界各地に住んでいるが、これらの民族や国民はすべて、より適した生活条件の土地を目指して移住してきた移民と、その子孫によって形成されたものである。人類は今後も、生活の糧を得るため、あるいは快適な生活を求めて、国内のみならず国境を越えて活発に移動し続けることであろう。〉

〈国際間の人口移動(移民)についていえば、地球上に人口分布と経済発展の不均衡が存在する限り、人口稠密で労働力過剰の国から人口希薄で労働力不足の国への人の移動は絶えないであろう。地球上に富の偏在が存在する限り、貧しい国から豊かな国への人の移動は不可避であろう。〉

〈世界の現状を観察すると、開発途上国における人口爆発と社会経済開発の停滞、先進国における人口革命と経済発展という顕著なコントラストが見られる。開発途上国においては、人口激増と貧困の悪循環が生じている。一方、先進国においては、豊かな社会が形成され、出生率と死亡率がともに低下し、少子高齢化社会を迎えている。そこでは、製造業、重化学工業等の基幹産業やサービス部門における労働力不足の問題が新たに生じている。〉

〈移民とその末裔である国民は、いったん地域共同社会(国民社会)を作り上げ、あるいは社会の構成員としての地位が認められると、自分たちの獲得した利益を守ることが第一義的な関心事となる。新たな移民の到来に対しては次第に閉鎖的な態度をとるようになり、ついには門を閉ざしてその移住を防止するに至る。このような入国管理体制は、それぞれの国民(現住者)のなわばり意識(移住希望者の国民共同体への加入を拒否する姿勢)を背景とした一種の縄張り体制と見ることができる。〉

坂中移民国家論は有終の美を飾れるか？

私は前記坂中論文をもって移民政策の嚆矢とし、それから40年間、移民政策一本の道を歩んだ。誰もが恐れをなしてさわろうとしなかった移民国家大綱の立案に全精力を傾けた。四面楚歌と一人旅が続く中、自らを叱咤激励して移民国家の根本原理の究明に心血を注いだ。

その間、切れ目なく移民政策論文を書き続けた。移民政策研究の白眉といえるのが、2014年に出た『新版 日本型移民国家への道』(東信堂)である。さらにこの5月、世界

の人々が移民国家ジャパンの誕生を歓迎する契機となればと願って、英文の移民政策論文の決定版：『Japan as a Nation for Immigrants』を発行した。すでに坂中移民国家構想は海外で広く知られているので、近未来の地球社会のあり方を視野に入れたこの英文図書は世界の知識人に衝撃を与えると予想している。

最近、親しい英国人ジャーナリストから、「革命的な移民国家構想を公言している坂中さんに官邸から圧力はないのですか」と尋ねられた。私は「見解が無視される状態に変わりはないが、これまで永田町から坂中構想に対する批判、圧力は一切ない」と答えた。彼は「日本は自由にものが言えるいい国ですね」と述べた。

日本政府は危険な思想家の唱える移民革命思想を敬して遠ざけるといふか、見て見ぬふりをしていふか、真意は分からないが、政治が坂中移民国家構想に干渉することはなかった。

与野党を問わず日本の政治家は、日本が直面す最大の政治課題＝移民問題について及び腰といふか、傍観者の立場に終始した。これまで国家百年の計に一家言のある政治家に会ったことがない。

日本の政治家はよほど移民が嫌いに見える。時代遅れの無責任政治の極みであるが、革命的な移民政策の立案者にとってはそれが幸いした。頭に浮かんだアイデアを誰に遠慮することもなくストレートに表現できた。気がつけば、多数の移民政策論文を発表し、世界が日本のミスターイミグレーションと認める移民政策研究の第一人者になっていた

私の使命は移民国家理論の完成で終わらない。移民国家の建国という大業が残っている。新国家建設の偉業を達成すれば坂中移民国家論は有終の美を飾れるが、国事に奔走する者にとってそれは私事だ。大事の前の小事だ。それに、何もかもうまくゆく人生は私の性に合わない。

20代の時分から、いい事づくめの人生などこの世に存在しないという人生観を抱いていた。70になった今も、よい事とそうでない事とが半々で終焉を迎えるのがあるべき人生だと思っている。理路整然とした論文のような人生などあり得ない。仮にあったとしても、そんな完璧な人生は心の葛藤も人間味もない。およそ味気も何もない無味乾燥な人生だ。

画竜点睛を欠く人生に満足である。入管生活では有言実行をモットーに生きてきたが、さすがに移民国家の創成については未成交響曲で終わるのが当然と考えている。それは三世代の日本人の努力の積み重ねを必要とする世紀の大事業だ。

移民国家百年の指針となる理論体系の基礎を築き、八分までの困難の仕事をやりとげたので、将来の国民への責任を果たしたと言い切れる。私の志を引き継ぐ移民革命の志士たちが輩出し、移民国家の金字塔をうち建ててくれると信じており、日本の将来については心配していない。

天命を知り、天職に従事し、運命に従う

現在、私のライフワークの「移民国家への道」は八分あたりまで来たと思う。人口崩壊の重大性を指摘し、解決策の移民政策理論をほぼ完成させることができた。あとは国民世論と政治を動かす仕事が残っている。この二分の仕事はほかの人にやってもらいたいと思う。

わたしは、日本型移民国家の道をつけた移民政策理論のパイオニアとして象徴的な役割をはたす。困難の道を切り開く責任から逃れるわけではない。仕事の力点を移民政策理論の構築からその啓発活動に移すということである。私が一歩引くことによって、坂中ドクトリンに共感する新進気鋭が集まり、大事業の完成が早まることを期待する。

年を取ったせいか、何事も運命として受け入れる心境になった。「天命」と「天職」を授かった晩年をいかに生きるべきかを考えることが多い。

日本の移民政策研究の先駆者の天職に恵まれ、新しい国を創造する天命をたまわったことに感謝する日々である。

他方で、天命を知り、天職に従事し、運命に従う、そんな幸運を独り占めするような人生があってもいいものかと不安に襲われることがある。いいことばかりの人生などあるわけがない。これから坂中英徳の真価が問われる時代を迎える。坂中構想が山場を迎えると、産みの苦しみが待っている。山あり谷ありの厳しい状況が続く。この先、どんな難問難関が待ち受けているかしれない。艱難辛苦に耐え、老骨に鞭打ち、一路ゴールをめざす。

以下は、今後の行動指針である。多くの人との出会いがあり、多くの人協力があって、今の自分があることを忘れず、国家国民のため尽力すること。無私無欲に徹し、原理原則を貫くこと。

移民立国への道の先導者の立場を自覚し、その責任を全うすること。厳しい局面を迎えても決して逃げず、移民革命の最前線で矢面に立つこと。

百年の大計を立てるものであるからじっくり考えて行動すること。民度の高い国民が移民政策を推し進めてくれると信じること。

移民国家日本の象徴的存在になることを究極の目標とし、歴史的な仕事を成し遂げるに足る器量を身につけるため精進すること。

以上、自らを戒める言葉を綴って、おのれを律することにした。正念場を迎えた時に迷わず王道を行くためである。

移民国家誕生の胎動を感じる

日本の歴史はじまって以来の移民革命を先導しているのだから批判の集中砲火を浴びるのはあたりまえである。個人攻撃が坂中英徳ひとりに集中するのもやむをえない。一切の責任は移民政策の口火を切った坂中にある。私が敵役にまわることによって歴史の歯車が

動くのなら本望である。

それはそうと、なぜ非難と罵倒の連続に見舞われるのか。なぜいつも孤軍奮闘なのか。現状維持と満場一致が好まれる日本の知的世界においては、社会の常識をくつがえす異端の徒は嫌われるということではないか。インターネット上で国粹主義者から「売国奴」とののしられているが、革命的移民政策を提唱している坂中英徳は当代随一の危険な思想家ということなのだろう。

移民革命の先導者の生き方を変えるつもりはない。いかに反対勢力が強力であっても、いかなる脅しを受けようとも、人口崩壊の危機が深まる日本を救うため信念を貫き通す。

さて、4月18日の朝日新聞の「戦後、移民——日独世論調査」によると、日本では移民に賛成が51%、移民に反対が34%で、賛成が反対を上回った。ドイツでは「移民を受け入れてよかった」と答えた国民が82%に上った。この驚くべき世論調査の結果は、孤高を持する私を奮い立たせてくれた。

このように移民政策をめぐる最近の空気が一変したことに加え、人口崩壊の恐ろしさが社会の各方面に浸透したこと、外国人観光客が爆発的に増えて国民の外国人観が好転したことが重なって時勢は移民興国論に傾いた。

そして、6月22日の「移民政策をすすめる会」の設立をもって、私は長かった四面楚歌の状況を脱した。20人の同士とともに移民国家の創建を旨として一路邁進する。

### 移民国家の産みの親

私は日本人の中では特異な人種に属すると思うが、各方面から多くの「あだ名」をいただいた。1975年に書いた『今後の出入国管理行政のあり方について』という論文が「坂中論文」と呼称されたことに始まり、「救世主」「売国奴」「冷酷な官僚」「移民政策の元凶」など数々の通称あるいは異名をつけられた。

それら以外にも、2005年に出た『入管戦記』という本の帯で「反骨の官僚」「ミスター入管」と呼ばれた。

2012年10月の『ジャパントイムズ』は「移民が日本を救う」という表題の記事において「移民革命の先導者」と内外に紹介した。

そして2014年5月、日本外国特派員協会において講演した際には、「坂中英徳氏は日本の『Mr. Immigration』として知られている」と紹介された。ミスターイミグレーションが書いた英語版移民政策論文の決定版が『Japan as a Nation for Immigrants』（2015年5月刊）である。世界の知識人がこれを何と名づけるのか楽しみだ。

物議を醸すような移民政策論文を数多く発表し、その実現に努めた実績がものを言って、多彩な顔を持つ坂中像が形成されたのだろう。

悪名を含む、いくつもの顔を持っていることは私の強みである。これは移民国家への道の先導役をはたすうえで強力な武器になると考えている。たとえば、移民1千万人構想は、

「反骨の官僚」といわれた元入管職員の政策提言ということで政府部内で重く受け止められたようだ。日本の代表的知識人である野田一夫先生から、「ミスターイミグレーションの立てた移民政策は説得力がある」との評価をいただいた。

以下は、移民政策が正念場を迎えた私の決意表明である。人口危機に見舞われた日本を救う「救世主」の責任をはたす。「移民革命の先導者」として最前線で闘う。もし日本型移民国家の理論的基礎を築いた実績が認められ、後世の日本人から「移民国家の産みの親」の通り名で呼ばれることになれば最高である。